屋上組と夢見る少女

鍛冶谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋上組と夢見る少女

【Ｎコード】
Ｎ８０４０Ｎ

【作者名】
鍛冶谷

【あらすじ】
九十九学園には屋上組という一風変わった集団がいた。彼等は色んな意味で普通じゃなく、学校や街では色んな事件が巻き起こる！
ある日一人の女子生徒が屋上にやって来て…

序話　白川　鏡子の悩み（前書き）

どうも始めまして。鍛冶谷です。
小説を初めて書いて、初めて投稿させて頂きました。

かなり見づらく、面白くないでしょうが温かい目で見てくれると幸いです。

ではどうぞ！

序話　白川　鏡子の悩み

夜の住宅街で一人の男と二人の女が居て、言い争いをしている。

興奮しているのか、かなりの大声での言い争いだ。近所迷惑もいいところだ。

しかし誰も文句を言いには来ない。他人に無関心なのか、それとも聞こえていないのか・・・

そうこうしているうちに、一人が動き一人に向かっていく。

そして・・・二人が真っ赤に染まり、一人が悲鳴をあげた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――

私、白川（しらかわ）　鏡子（きょうこ）は今とても悩んでいる。

4月に新しい学年に上がり、新しいクラスで見た目だけでクラス委員長に選ばれたこととか、（眼鏡に三つ網）新しいクラスでまだ一度も登校してこない人が何人かいるとか、（登校拒否？）学園の七不思議とか、（今時？）気にはなるけど私を悩ませるというほどではない。

じゃあ何をそこまで悩んでいるのかといえば、私の親友についてのことだ。

しかし相談しようにも相談できる人がいない。（友達が少ないわけじゃない。これ重要）相談相手を選ぶ悩みなのだ。

最近この悩みのせいで夜もあまり眠れてないので、頭も痛い。

もうすぐ授業が始まるけど、サボってどこかで休んでいようか、そう思っていると何やら上のほうが騒がしい。一年生が喧嘩でもしているのかと野次馬根性で見に行くが誰もいない。

気のせいかと階段を戻りかけたところで、屋上のほうから何かが聞こえてきた。

屋上にはカギがかかっているので一般の生徒は出入りできないのだが、どうもだれかがいるみたいだ。

私は気になったので屋上に足を向け、屋上への扉を開いた。するとそこには・・・

「テメェ！！今日こそブチのめしてやらぁ！！！」

「ハッ！かかってこいこの雑魚がぁ！」

「やめて！私の為に争わないで！」

なんか修羅場が広がっていた。

序話　白川　鏡子の悩み（後書き）

えー、いざ書いてみるとめちゃくちゃ難しい。

みなさんよく面白く書けますよね・・・

一話　八雲　紅時の朝（前書き）

お久し振りです。見辛いですが、どうぞ

一話　八雲　紅時の朝

キィ……、カチャリ

街が寝静まる深夜、家の中から人影が出てきた。

人影は何かに怯えるかのように辺りを見回し、そして…

「ねぇ…、どこいくの？……」

――――――――――――――――――――――――――――

朝

「くぁ……、ん！」

俺は身体を伸ばし、まだ覚醒しきっていない意識を目覚めさせようとするが…、

「…眠い。」

やはり、四時まで起きてたのは不味かった。激眠い。

今日は平日だから普通に学校がある。別に皆勤賞狙ってる訳じゃないが、俺はある事情があるためなるべく休まずに学校に行かなければならない。

眠い目を擦り自分の部屋のある二階から一階に降りると珍しいものを見た。

艶のある黒髪を長く伸ばした妖艶な雰囲気が漂う女性がエプロンを着け、キッチンで料理をしていた！？

……いや、まあ大げさに言う必要もないか。言い直そう。

朝が超絶激烈爆裂に弱いはずのうちの姉があろうことか、鼻歌混じりに普段なら俺に任せっきりにする朝食を作っていた。

？おかしいな、余計ひどくなっている気がする。多分気のせいだろう。

ズギャッ！！

「どうした？朝から化け物でも見たような顔して。もうすぐ出来るから、座ってコーヒーでも飲んで待ってろ。」

「じゃあ殴んなよ！？フライパンで！！しかも熱した！！！気絶するとこダッタワ！！！！」

「なんだ？もう一発逝っとくか？」

「イエ、スミマセンデシタ。オネエサマ。」

俺、即土下座。姉、うむ、と満足そうに頷く。

この横暴なのは俺の姉である八雲（やくも）　紅葉（もみじ）。俺、八雲（やくも）　紅時（こうじ）の血の繋がった姉兼保護者だ。

俺の両親は現在、海外で仕事をしているためこの家で二人暮らしをしている。

「しっかし、珍しいな。姉さんが朝からこんな動けるの。何かあった？」

俺が姉さんにそう聞くと、姉さんがムッとした顔で、

「なんだ？私が朝から朝食を作っていたら悪いのか？」

とちょっとふて腐れた風に言った。いや、そんなことないが…、…ああ、

「今日ユキさんが来るのか。それが楽しみで昨日寝れなかったと♪」

「！！！！なっ！！何故わかった！！！？アイツが仕事関係とはいえ久しぶりに二人きりで逢えるのが楽しみで徹夜でデートプランを考えていたことを！」

……いや、流石にそこまではわからなかった。目の下のクマ見つけてカマかけただけだし。つーか多分デート無理だろ。仕事だろ？ユキさん。

「大丈夫だ♪仕事の報酬だからな♪いやとは言わせないさ。言ったら、泣くから。」

…がんばれ、ユキさん。

そう、ウチの姉はこの見た目に反して恋する乙女なのである。

「またなんか失礼な事考えなかったか？紅時。」

「考えないから瞬間的に殴るの止めろよ！？」
殴られた時が跳んだぞ今！？痛みとテーブルに突っ伏した結果しか残んなかったぞ！？
「それで？今回何の仕事で来んの？ユキさん。」
「ああ、あれだ。今流行りの『悪人斬り』。」
そう、今この街では不良やヤクザを狙った切り裂き魔、通称『悪人斬り』という事件が街を賑わせてる。しかし、被害者も軽症ばかりでそれどころか強盗の現行犯を斬って捕まえさせたって噂もあるくらいだ。
「ふーん、ユキさんが動いてんだ。ってことは、アレがらみなんだ。アレ」
「アレアレ言うな。こんがらがる。…まあ、恐らくな。言っておくが…」
「わかってる。進んで関わらんよ。そんな面倒そうなこと。っと、そろそろ時間だから学校行ってくるわ。」
「ん、いってらっしゃい。車に気を付けるんだぞ。」
子供じゃないんだからと言って、俺は玄関へ向かっていった。
さて、少し寝不足だし学校着いたら屋上（きょうじょう）で一眠りすっかな～。

一話　八雲　紅時の朝（後書き）

いかがでしたか？
このあと少し色んなとこを修正します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8040n/

屋上組と夢見る少女

2010年11月6日13時25分発行